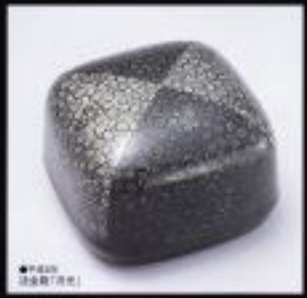
人間国宝

元京都府伝統工芸士

前史雄の世界

―高らかに謳いあげた沈金の煌めき―。



●平成20年
沈金箱「月光」

となみ帯®

となみ織物株式会社

京都市上京区寺ノ西通堀川西入　075-431-3301

http://www.kyo-tonami.com E-mail:info@kyo-tonami.com

沈金の叙情詩人——前史雄

人間国宝前史雄は
現代を代表する「沈金の叙情詩人」ともいうべき存在。
「沈金の名工」と称賛された父・文雄の感性と技法を
確かな眼で受け継ぎ、
沈金の技法をさらに高度な技法に昇華させました。
従来の沈金は黒漆地を主体としていたのに対し、
前史雄は金粉を蒔く前に施した金地の上に
沈金を施すという新しい技法を考えて登場しました。

●作品名「朝光」
沈金箱「朝光」

その斬新なデザインは抽象的な詩情をたたえ、
静かな表情の中に
深い思いや光彩芳が秘められています。
この「人間国宝前史雄の世界」は、
沈金技術の金箔素材の技「深い彫りを
魂の上へ巧みに配した
詩情性と情感にみちた逸品です。

代々受け継がれ、
培われてきた陰陽の美観がいま花開く。

明と陽。
その鮮やかなぬくもりの世界。

●作品名
沈金箱「朝光」

数千年の時空を超えてきた漆芸美の集大成

いまから約五千五百年前、縄文時代のひとびとは漆の木から樹液を採取し、それを紙や皮、木材の塗料として使うことを知りました。その頃、土器や木器に塗られた漆はずれかこは五千年以上を経たいまもなお、みずみずしく艶やかな肌を保っています。最古の伝世品である法隆寺の玉虫厨子、わが国の考案とされる蒔絵を施した正倉院の赤太刀、まさに日本的な漆芸としてゆかしいわゆる所蔵木器類の本箱、硯箱を巧みに配した美しさ華麗などなど、それらにみられる漆芸の巧みさは、歴代のわたしたちの目を楽しませてくれます。

なかでも江戸時代には、漆塗面に文様をうき彫り、刻まれた文様のなかに金粉を付着させる技法で、中国宋代や元の時代に盛んに行われました。

おだやかに人の心を魅了する深みとぬくもり、柔らかな暖かさ

鎌倉時代から六百年以上の歴史を誇る輪島塗。その名が全国に知られるようになったのは、江戸中期、文化文政年間には器種が多様化し、精巧の高いる品がつくられるようになりました。多々ある伝統工芸のなか、最も堅牢であるといわれている輪島塗は、深みと暖かみのある色つやが特徴です。

落款は、すべて手作り。先人が伝を受け継ぎ、地つて来た職人の筆書きになっています。

なかでも新文様の沈金技法は、近代感覚を充満した中興の祖といわれる父・大峰の加飾技法の特色を生かして新味とした優美・繊細な筆致で、あたかも金箔の陰影あを感じれる高雅さがあります。

●平安文様
（法金剛院「竹蔵」）

明と陰
そのおだやかな静けさの世界

指先にこめる意匠への想い、鮮やかに浮かび上がる匠の芸

面取り、鎬取り、点取り……
さまざまな形の、
要所要所に適した金粉を用いて彫りあげられる、
いとも鮮やかで繊細な意匠。
匠のたゆみなき技が、まのあたり美しさと色鮮やかに浮き出す。

●平安文様
（法金剛院「竹蔵」）

上塗りされた漆の表面が、鏡い光沢を放ち出す。
まのあたりに、漆を塗り重ね、
漆が微妙を増しきり、完全に乾くほんの少し前に、
極薄く金箔が、金粉を押し込む。
乾きこった漆の表面にある余分な金を拭きとる。
仕上げに、ふとしたはいにいたるまで。

『匠史歳時記』

一九四〇年　輪島市生まれ
一九六二年　金沢美術工芸大学卒業後　父・前大峰に師事
一九六八年　日本伝統工芸展　初入選
一九七一年　日本工芸会　正会員
一九七二年　日本伝統工芸展　文部大臣賞
一九九二年　日本伝統工芸展　日本工芸会総裁賞
一九九三年　日本伝統工芸展　重要無形文化財保持者賞
一九九五年　日本伝統工芸展　日本工芸会賞
一九九七年　日本伝統工芸展　日本工芸会保持者賞
一九九九年　重要無形文化財（漆芸）保持者（人間国宝）
二〇〇一年　紫綬褒章受賞　日本工芸会参与